相談ネットワーク通信

2014.9.26（金）

子育て・教育なんでも相談ネットワーク

No.86

700-0822　岡山市北区表町1-4-64 上之町ビル３Ｆ

TEL・FAX　086-226-0110　Ｅメール：soudan-net@vivid.ocn.ne.jp

相談ネットワークと共に歩んで

高田　智長

相談ネットワークの会員・賛助会員の皆様、今総会を機に相談員を退かせていただくことになりました。

一九九六年三月、定年まで一年残して退職を決めた私は、かねがね何かとお世話になっていた玉島ＴＥＬ教育研究所の田中和裕・允子夫妻のもとを訪ね、いろいろアドバイスをいただく中で、退職後の歩む道を具体化していきました。一つは、「言葉を育てる会」の事務局を手伝うこと、今ひとつは「教育相談」のしごと。それと、これは私の最大の趣味、学生時代から関わってきた「合唱活動」に本格的に取り組むことです。

今まで続いた相談ネットワークのしごとは、田中夫妻に連れられて、丸の内の頃の事務所に顔を出し、カウンセリング修行の道に踏み出す決意を固めた時から始まったわけです。

九六年夏の総会で、今は故人となられた立石さんとともに相談員の仲間に加えていただき、以来学びと反省を繰り返しながら、十八年間過ごして参りました。「ネットワーク通信ＮＯ・２８」に若かった私はこんな駄文を寄せています。

「相談ネットワークの一員に加えていただいて一年余、本当に学ぶことの多い日々を過ごしてきました。これはと思われる本を読むのはもちろんのことですが、それにも増して、定例学習会等での先輩方の議論には、大いに啓発されます。とりわけ、私の担当日に電話相談や面接をされている難波先生の姿に直に接していると、遠い昔に経験した教育実習の頃を思い出してしまいます。とにかくまねびながらの一年余りでした。これからもですが・・・。」

文中に出てくる大先輩の難波先生は今後ともネットワークの大看板として活躍なさろうかというのに、若輩の私が引退とは申し訳ないことですが・・・。

言い訳を言わせてもらうと、

実は四年前に患った心筋梗塞で、手術は成功し無事生還できた（酒も飲めるし、好きな歌も朗々と歌えるし、全く普通の生活が可能になった）のですが、如何せんスタミナの低下が著しく、スタッフの皆さんといろいろ活動する際に自らをもどかしく感じることが多く、思い切って退く決断をした次第です。

幸い、ここにきて、アイディアと行動力を兼ね備えた若手が立て続けにネットワークの仲間に加わってくれています。私としては、後顧の憂いなく、身を退くことができます。

さて、十八年の間には、数多くの電話相談と時には面接相談も経験しました。今でも、強く印象に残るものを紙面の関係で、一件だけ紹介します。

実直そのものの両親と優秀な兄をもつ、ほんの少し知的な遅れのある弟の進路をめぐる事例です。

「両親は知的に劣る弟息子を決して見放すことなく、家庭教師をつけて懸命に励まし続けた結果、調理師学校に入れ、なんとか卒業させるところまでこぎつけた。しかし、料理店に就職しても、うまく仕事をこなしていけず辞めてしまった。この先どうしたものか」という相談が知人から私宛に回されてきました。

とりあえず、本人・両親と会って話し合い、ネットワーク関連の授産施設に相談に伺うことになりました。結果的には幸いにも受け入れてもらえたのですが、その際、面接された所長の厳しい言葉には、正直驚かされました。所長の本人に対する質問に、すぐ父親が代わって答えようとするのを、ピシャリと制して曰く、

「貴方は黙って。本人に喋らせなさい。息子さんは確かにお預かりします。責任を持ってお育てします、が以後はできるだけ口出し無用に願います。それをお約束できないなら、今すぐ連れてお帰りください。」

「あなたは、息子さんの自立を信じて待つことができますか。」

その後、文字通り、紆余曲折を経て、彼は何とか独り立ちの日々を過ごせるようになったとのことでした。何度か彼には会って話すこともありましたが、落ち着いた雰囲気で、時に笑顔も見せながら話してくれました。『愛して信じて待つ』という言葉の意味と大切さを、そして、それを実践する難しさを、私なりに心に刻み込んだ出来事でもありました。

相談員としての生活は、たくさんの喜びと、ときに深い悲しみを味わうものでした。

「創立一〇周年記念　難波一夫著『心に包帯をまいて』出版記念会」に参加してくださった皆さんからの熱いお祝いや励ましの言葉の数々、響き渡る美しい歌声、まさに「熱気と感動の三時間」でした。「『愛の泉賞』受賞記念祝賀会」。ネットワークの旅行や学習会に参加してくださった岡大の先生のユニークなお祝いメッセージが心に残っています。『初めて聞く賞だけれど、文化勲章よりりっぱなことは確かでしょうネ。』

「通信復刻版I-IIの刊行。創立二十周年記念「旭爪あかね講演会」自分の足で歩き始めようとする「稲の旋律」の主人公と旭爪あかねさんを重ね合わせて聞き入りました。深く心に染み入る講演でした。

また、内輪のことになりますが学習会・花見・安い温泉付きの旅行等々、ほんとうに楽しく充実感を味わったものでした。

一方で、大切な仲間一直接の交流があった方だけでも内藤・南雲・有森・守安・立石・奥田の各先生方一を喪ったことは皆さんまだまだ若かっただけに、残念でなりません。

ところで、今の世、欠陥選挙制度のご利益で虚構の多数を占めた勢力が、国民の声を聞く耳をもたぬとばかりに、矢継ぎ早に打ち出す悪政の数々に、国民の生活が危機的な状況に追い込まれようとしています。子どもの健やかな成長どころかこの私が　国民学校三年生の夏まで体験したあの『忠君愛国』の教育が復活される恐れ無しとも言い切れないような状況です。ここ岡山でも、およそ教育的営みとは言い難い「ニンジン作戦」が提示され、論議を呼んでいます。このような状況の下、岡山県教育文化センターが核となって教育行政への働きかけ、またセンターの一翼を担う相談活動はますますその価値を高めていくことでしょう。

会員・賛助会員の皆様の一層のご支援を心からお願いいたします。

（たかた　ともなが）

総会が開かれました

さる八月二十三日、岡山市立中央公民館において、二〇一四年度「相談ネットワーク」の総会が開かれました。

佐藤さんの歌は、悩む若者へのメッセージや生きる希望を感じるものでした。ネットワーク卒業生が元気にお仕事や子育てをしていると、私たちも元気がもらえます。「また来年きまーす」と約束してくれました。

難波代表が、「ネットワークのこれまでとこれから」を報告し、承認されました。

今年度は、新しい取り組みを始め、「相談ネットワーク」をもっともっと多くの方に知っていただくと共に、岡山の教育や子どもたちの支えになるように、努力をしていきます。今まで以上に忙しくなるので、相談員に加わってくださる方を探しています。

志賀兼允さんの記念講演では、実際に行っている、高卒認定ゼミでのやりとりや、中学校教師時代の子どもとのやりとりなどリアルに語っていただきました。。

元暴走族のリーダーが高卒認定ゼミ「塾長」をしていることや、親が付き添ってきた子は長続きしないこと、今の自分を何とかしたいと本気で思っている子は必ず変われること等を、事例を挙げて、大変なことを軽く話してくださいました。（「ほめるときには怒ったように」は、志賀先生の口癖）

子どもたちの未来を信じてやまない先生の言葉「志賀語録」には、笑ったり同感したり。話に感動して涙を流す参加者もありました。

八月二十三日はたくさんの会が重なり参加しにくい条件であったと聞きました。日程についても、来年度総会は考えていきたいと思います。参加された皆様ありがとうございました。

今の私を責めないで　未来の私を励まして

生まれ育ち　学びながら育つということ⑤
子どもらが「自分らしく」振る舞うとき　その1

教師の提案を蹴った自分たちのミュージカルを終えて

高卒認定フジゼミ講師　志賀兼允

サッカーのかつての日本代表監督で、数学者のオシム監督は「たとえば、国家のシステム、ルール、制度にしても同じだ。これしちゃダメ、あれしちゃダメだとがんじがらめに縛るだけだろう。システムは、もっとできる選手から自由を奪う。システムが選手を作るんじゃなくて、選手がシステムを作っていくべきだと考えている」と述べている。

自由な空気の中で、モタモタしながらも、自分たちで決め、悩み、考え、作り出す中学生のミュージカル。やり終えて、マイクを持った生徒が感動に声を詰まらせながら…

「けんかばかりしてて、一時はどうなるかと思ったけど・・・。こんなにすごい事ができるなんて、こんな事ができたのも、みんながんばった事も確かだけど、先生達や地域の人の励ましがあったからだと思います。」

文化祭最後の全校合唱の後、全校の前で涙ながらのメッセージを届けた奈っちゃん。文化祭は、確かに、一人ひとりの内面を深く揺り動かした。そこに至るまでに次のような経過があった。

中3の一学期末試験を終え、学校は秋の「文化祭」に向かって第一回企画委員会で助走。教師側から「二十一世紀最初の『文化祭』。新しい演劇と合唱を！」と意気込んだ提案がなされた。生徒側から「先生達の提案した作品を見て、全校の声をアンケートに取り、決めたい」という声。翌日、教師提案の演劇ビデオ「グッバイマイ」鑑賞。作品は中学生に大きな感動を呼ぶ自信作。その日のうちにアンケート集約。が…しかし、95%が拒否という無残な結果。「こんなんダサい」「暗い」「こんな劇じゃ、立候補せん」…。ぼろくそである。そして、「明るく、楽しいのがいい！」「ミュージカルで、歌って、踊りたい」等々。教師の意図はもろくも崩れた。

アンケート結果を検討し、第二回企画委員会。「ミュージカルで、作品はディズニー、各クラスで候補作品を出し、アンケートで一つに決める」ということになった。

作業は、企画委員会を中心に勝手に進む。そして『眠れる森の美女』が選ばれた。「うん？」と思いつつ、後には引けぬ。脚本委員会が立ち上がり、「眠れる森の美女」のビデオ、絵本を探し、教師の車に乗って（生徒はこれが楽しみ。ジュースがおごってもらえるから）街に出て、ウロウロ・・・。探し出したビデオを全員で見る。「パート別に舞台のイメージを広げ

る基礎をみんなが作るときの参考に」という趣旨で・・・。モタモタと非効率的な時間が流れるが、この動きが何とも楽しい。どんなふうになるのやら・・・と思う不安感が心地よい。

先生達の提案を取り下げ、作品が生徒の意志で選ばれたというスタートの決定がみんなの心をつかんだのだろうか。それとも、単にやりたい事ができる喜びからなのだろうか。とにかく、みんな燃えている。教室でビデオを見ながら、「魔法をどうやって舞台にするん？」「お姫さんや王子様より、妖精が主役じゃのお」「わし、豚をやりたい！」「背景がやりたいのお」など、心地よい私語が飛び交いながら、脚本作りが展開する。

委員会は夏休みを利用して、分担が決められ、一人一人の役割が明らかになり、動き始めた。教師が一切手を出せない勢いである。しかし、自立的なのか、図々しいのか、身勝手な要求ばかりが出てくる。「先生！台本、パソコンで打ち直して！」「わからんところ、適当に先生の方でやっといて！」「委員会開くけえ、冷房の効くところ探しといて」「ビデオのままだと、舞台がころころ変わるけど、どうしたらええん」　面倒なことばかり持ち込む。自分たちでやると言いながら「知恵を出し合うんじゃないの？」と抗うが、「これは知恵じゃなくて、単純作業なの！私たちは忙しいので、先生やっといて！」と意に介さない。わがまま放題。しかし、勝手な事を言い出すのは、物事が動く時の証し。相談されるのは頼られているものと考え、可能な限り、頼まれた事は手を貸す事に。自立とは協同の精神の中で鍛えられるもの。教師も彼らと一緒に自立の道に向かう事にした。

台本の骨格もでき、夏の全校登校日に脚本を全員に配布。各パートの募集後、全員そろっての第一回実行委員会。みんなで構想を練る。公民館を借りての台本読み合わせも計画され、夏休みというのに、教師の都合も聞かずに、勝手に物事を進める。「先生、その日都合があって出れんぞ！」「いいよ、先生、私らだけでやるけえ」である。自分達で決め、自分達で創る意気込みが、いつもと違う風景を描く。・・・一回目の台本読み合わせ、休憩後、場面ごとに集まり、自分達で練習している。この光景を見て、「今年の文化祭、成功だな」と思った。生徒自らが動き始めた時、終わりに向かって物事が多く動きだす。読み合わせを終え、ジュースを飲みながらの雑談。

「先生、私らびっくりしたよ」

「何が？」

「今までは、先生達が勝手に決めた作品ばっかりだったけえ、今年も私らの意見は入らんと思っていたのに・・・」

「へえでも、アンケートでみんなの意見を受け止めると約束したんじゃけえ、ほんで、みんながミュージカルやりたっていう事になったんじゃけえ、それに従わなきゃいけんじゃろうが」

「そこが違うんよ。アンケートなんかとったことないし、たとえとったとしても、結局、先生たちの提案どおりになるじゃろうな！ってみんな思っとったもん・・・」

「・・・・」

つづく

（しがかねみつ）

無謀な世界一人旅 ③

～あこがれのメトロポリタン美術館へ～

相談ネットワーク　正保　宏文

念願のメトロポリタン美術館へ、足の痛みを我慢して、ホテルから三十分ほど歩いて行った。途中、セントラル・パークを横切ったが、それは単なる公園というよりも森林公園といった感じで、多くの老若男女が走っていた。公園の木々は、走る人に木陰を提供し、小鳥たちは、応援歌をさえずる。日本の小さな公園とはまったくスケールが違う。これがアメリカなのかもしれない。

十時前にメトロポリタン美術館に着くと、観覧予定者が長蛇の列。一番最後がどこなのか分からなかったので、列の最後に着けばよいと思い、玄関前の階段下で待つ。二百万点所蔵しているだけに、建物はとてつもなくでっかい。十分くらい待って、やっと最後尾にならんだ。切符売り場は、地域や国ごとに分かれており、小生は、日本が含まれた売り場で買う。小生は、六十歳なので、パスポートとクレジットカードを添えて、シニア券を求めた。17ドルだった。ちなみに大人は25ドル。支払いは、カードオンリーだった。

切符売り場には、どういうわけか日本人は並んでいなかった。もしかすると、日本人は、みんな団体客だったのかもしれない。日本語のガイドをインフォメーションでもらい、美術館の地図を広げてみた。むちゃくちゃ見る部屋がたくさんあった。どこから見るべきか迷ったが、迷ったところでどうにかなるものではない。玄関に近いところから、手当たり次第に行くことにした。そこには、見たこともないようなブローチなどのお宝がならんでいた。多少今までいろんな物を見てきたとの自負心があったが、メトロポリタン美術館の前では、そんなものは、いとも簡単に打ち砕かれていた。小生の骨董収集なんて、なんてちっぽけなことなのかとお宝たちの前に、魂を揺さぶられ、ひれ伏す以外に手はなかった。

今回の旅は、骨董収集の終焉の旅になるかもしれないと密かに思った。自分で骨董を収集するのも悪くはないが、物は考えようで、世界中の美術館で自分の収集品を保管してもらっているくらいに考えれば、世界一周の口実もできて、旅が楽しくなるかもしれない。骨董収集に熱を上げるよりも世界中に散らばっている本物を見て歩く方が、経済的に安くつくし、盗難などの要らない心配をせずに済むというメリットもあると思うに至った。預金が全くない中で、これから世界100カ国を巡るというのだから、他人が聞けば、なんて馬鹿な・・・と思うであろう。

話を元に戻そう。メトロポリタン美術館の展示室は、1Fだけでも約200室、2F，3Fをあわせると約400室が。その膨大な作品たちを一日で堪能するの

は絶対に無理。今回見たのが、約半分くらいか。特に印象に残ったのが、アフリカの国々の作品たちだ。エネルギッシュでダイナミックで生気に溢れている。見ていて非常に楽しい。ルンルン気分になって、足が痛いのも少し忘れるほどであった。

人類は何千年も前から芸術作品を作り上げてきた。ただ、その当時の人は『芸術作品』を意図したのではなく、身近な美を追究するための装飾品や権力を誇示するための装飾品を創造した。常に人間は、美しくありたいと考えているので、そのための品々を作った。また、人間の力を越えた自然の力に対する畏怖の念から呪術や信仰のための品々が創作されるようになったと思われる。無名の人が作った作品たちが、私たちに生きる勇気と元気を与えてくれ、限りなく力強いエールを送ってくれるのだから嬉しいかぎりである。

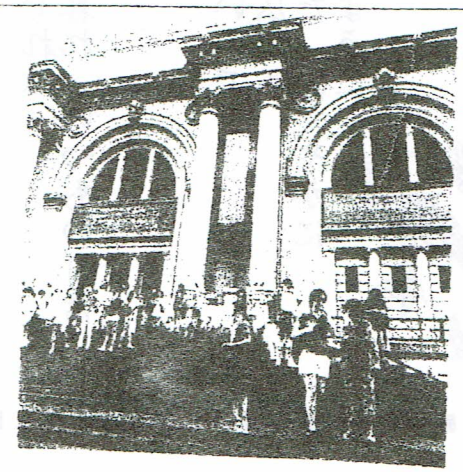
その後、アジアの展示室でタイのガルーダを見た。小生のガルーダの方がおもしろいと思ったが、それは手前味噌だろうか。また、アッシリアレリーフの見事さにも言葉が出なかった。なぜ、こんなに素晴らしいアッシリアレリーフがあるのか、岡山市立オリエント美術館のレリーフがかすんで見えるほどの力がそこにあった。日本室には、載金が見事に残っている地蔵菩薩があった。鍋島焼きも尺皿を含めて、6点ほど展示されていた。日本室には、何人かの比較的新しい人（イサム・ノグチ、徳田八十吉、などの作品もあった。そのことにより、メトロポリタン美術館は常に進化していることを知った。すごい美術館だ。今日、200近い国が存在しているが、学芸員は、常に各国の美術作品の動向に目を向けているということなのだ。

痛くて重い足をひこずって、アメリカの作品さらに、ヨーロッパの作品へと足を向けた。フェルメール（5点）、ルーベンス、ベラスケス、ゴヤ（10点位）、エル・グレコなどの作品群をこれでもかこれでもかと展観。贅沢な時間を過ごしたのだが、一方で、右足の激痛に耐え、死力を尽くしたという感じ。足が痛い痛いの三乗くらいだった。

朝の十時過ぎに入館し、何度も何度もイスに腰を下ろして休憩。閉館の15分前に追い出されるまで、メトロポリタン美術館を満喫。昼食も抜いて、芸術三昧の時を過ごしたのだが、展観できたのは、約半分くらいだった。メトロポリタン美術館の大きさは想像を絶する。足は痛いし、ザックをかけた肩が痛いし、本当に疲れ果てた一日であった。

健康と体力と気力が旅には欠かせない。大失敗の旅になるかもしれない・・。脳裏を不安がよぎった。

（しょうほ　ひろふみ）



市民のための子育て・教育講演会に向けて、相談員が学校や公民館・賛助団体等へチラシを持って行きました。どこも快く受け取ってくださって、元気が出ました。参加者が多いともっと元気が出ます。

八月にコープ大野辻で行われた「憲法学習会」には、小学生もたくさん参加してくれて、難波代表の戦争体験のお話を熱心に聞いてくれました。パフェも作って楽しい会でした。九月は、正保さんの「憲法をくらしの中に」のお話です。

長い会員さんが会費が気になっていたのですがと言って、わざわざ上之町の事務所を訪ねてくださいました。現在のお子さんのことを話して、「私の母は１０６歳、難波先生まだまだ頑張って」と難波代表にエールを送ってくださいました。

岡山に続いて倉敷でも１２月６日（土）ライフパーク倉敷で市民のための子育て・教育懇談会を開きます。研究者代表として澤山美果子先生の参加も決まっています。この会が倉敷市人権啓発活動事業になるように、九月九日には岩佐さんがプレゼンに行きました。

ふじばかま

ふと　見上げた青空に
すいすいと赤とんぼ

ぶんにそっくりの雲が
夕陽に染まる

イバイ　また明日
子どもの一群れ

わらない　それは
いつもの夕暮れ　いつもの日常

まの　甲高い声で
うすやみが広がる
明日も　また　おだやかに
平和であるように